傘の中の小世界

春になって優しい雨が降る
まだ冷たい、でももう痛くない
折り畳み傘が頭の上に咲く
雨に濡れるのが気になるくらい
私は私を見れるようになった
君を覗き込めば自分が映るから

冬に凍りついた時が動き出す
君はどこへ何を運んでいくのか
両手を使って水を掬い上げる
隙間をすり抜けていってしまうけど
濡れた手が雨と川の繋がり
冷えるのも構わず傘の柄を掴む

雨和七瀬

秋の頃には紅い葉が流れていた
なぜだか羨ましく感じていた
雨粒になりたい、そんな胸の内
川の流れと一つになったら
沈んでいく自分を気にしないで
傘の外でも二人だけの世界になると思った

夏の湖に花火の光を雨粒が揺らしていた
あの日の景色を皆の中、独りで見ていた
酒を流し込んで腹を満たしてく
あの日と違う全てを楽しみたかった
君が居ないことまでは楽しめなかった
二人で入った傘が花火より美しい思い出なんだ

春になって優しい雨が降る
雨粒が川に生きるものを豊かにする
泥だらけになるのも構わず足を入れる
君は私の元を離れて海に行くんだろう
私はまだ水たまりの中だけど
傘が無くても君の隣に追いついてみせるよ